

柳生街道を行く

剣の道



名古屋大学郷土研究会

ま え が せ

今度の合宿の目的は名古屋城についての研究に一応の締めくくりをつけるため、
又、我郷土研究会のナンバー間の親睦を計るためである。小生が特に重んじるのは、
後者の方である。狸犬？には実に様々な人間がより合っている。上級生の方々の間
は、比較的うまくいっているように思われる。ところが次の時代を背負うべき
一年生間が乏しいのは実に残念である。幸か不幸かこのたびの合宿計画が一年生の
手になった。ここでおおいにハッスルして来たるべき新入生にやなえよう。

合宿の後半、柳生街道を歩き、剣の故郷柳生の里を訪れ、月ヶ瀬街道を通って
花と月を賞で、夕いに酒をくみかわそう。そして上野に出て、俳句の一つでもつく
ろうではないか！

この一おりは案内書のつもりでつくったものである。少しでも参存になれば
幸である。

編集後記

資料がないので非常に困った。多少増量が入っている。雨が降っている。

二ページ目から三ページ目にかけて

日程

①集合

1. 場所 名古屋駅乗車口⑩⑪番線改札口(関西線)
 口時刻 4月2日(日曜日)午前7時30分 室田 8:20

②日程

※ 1日(4月2日)

名古屋 ~~東山線~~ 奈良 青春全館 ユースホステル
 8:06 (準)かすが一 10:30

2:00 まで自由行動

2:00	- 名古屋城研究について - 名古屋城着工まで(ポーター 西川君) - 名古屋城の地形と軍事的意義(加藤君)
5:00	(築城の動機)
5:00	夕食 & 自由行動
7:00	
7:00	- 名古屋城研究について - 名古屋城の築城(山岸君) - 城の構造と軍事的意義(樋口君) - 城下町の町割と町名
10:00	
10:00	消灯

※ 2日(4月3日)

6:00	起床 自由行動 & 朝食
9:00	
9:00	- 名古屋城研究について - 支配者の町民支配組織(片山君) - 町民の生活研究(鈴木元) - 特別研究 - 破風から見た名古屋城(津坂君)
12:00	
12:00	昼食 & 自由行動
2:00	
2:00	- 名古屋について - 方針 - スケッチ - 展示方法と内容 - その他
5:00	

4/3

名塚 8:06

奈良 10:30

山

4月3日(第2日)

5:00	自由行動 奈良市内見物
8:00	
8:00	
11:00	名古屋城研究総括と補充
11:00	
12:00	消灯

名塚 2:50 発

奈良 5:18 着

東神

第3日(4月4日)

6:00	起床
8:00	朝食と自由行動
8:00	
10:00	今年度の計画(昨年度の反省から)
10:00	1. 大まかな年間計画
10:00	2. 新入生募集について受け入れ方
10:00	3. 0日会について
10:00	4. 郷土の意義、目標
11:00	出発準備

相生街道踏査

コースホテル ——— 高畑 4km 葉多林峠 2km 大弦山

11:00 9:00 12:00 (昼) 1:30 10:00

3km 忍辰山 3km 大柳生(泊)

子持 (円成寺) 4:00 1:00

神野山

8:00 討論

1. 文ヲ連加盟
2. 校外クラブとの交流
3. クラブ、郷エ ついて

第4日(4月5日)

大柳生 ——— 阪原 ——— 柳生 ——— 月ヶ瀬(泊)

9:30 1km 3km 10:30 (昼) 13km 4:00 7:00 10:00 10:00

第5日(4月6日)

月ヶ瀬 ——— 伊賀上野市 ——— 名古屋

9:00 15km 3:00 ①(準)はやたま 3:46-5:30 ②普通 4:26-7:28 ③普通 6:15, ④(準)かすか 7:56-9:46 59:29

レポート(名城石研究)について

今回合宿の主目的は昨年度の名古屋城研究をまとめることにあります。10月~1月の間に部会で発表されたレポーターは発表したテーマについて問題点、不明点をかりこんで一つの討論資料のようにまとめて下さい。もちろん完成した一つの論文に出来ればはね抜けようです。

なおレポーターで合宿に参加出来ない人はレポートを先までに下記の住所へ着くように郵送して下さい。

三重県四日市市島田一色町12-12 樋口清司

費用について

・交通費

名古屋-奈良 133.9km 370円(学割 296円)

伊賀上野-名古屋 94.5km 270円

鶴舞 100.1km 280円(学割 224円)

他に準急料金 100円(距離に無関係)

・宿泊費

ユースホステル

一泊素泊料金

(注)会員に入会しておく事

250円 X 2 = 500

二食付

白飯

20円 X 5 = 100

シーツ代

100

100

・キャンピングカー人会員 700円

(食料費、テント代、燃料費等)

所持品 キャンプ用装備

1. 共同装備
 - テニール^{保板工}、スコップ、ナベ^小、ハンゴ^大、コタツ²、鍋、包丁、マナ板^板、シャモジ^取、バケツ、洗剤、フキン、出切^植、うちわ、マッチ^片、針金^取、糸針、薬品^種、殺虫剤^取、ローソク^取、地図、磁石^取、カメラ^取、ラジオ^取、ロープ^取、トランプ^取、筆記用具、ナタ^取、固型燃料^取、コッヘル^取、ラジース^取、歌集、時計、懐中電灯^{各自}

2. 個人

- 帽子、靴下^取、手袋^取、雨具、タオル、手板
- 洗面具、水筒、ゾウリ、食器類、ナイフ、フック
- ビニール^取、風呂敷、新聞紙、筆記用具、自分証明書
- Y.H. 会員証、薬品、米^取、チリ紙、レポート、資料

の毛布

のシラフ

1台2台

一、柳生街道

柳生流、十兵衛さんで知られている柳生の里に続くこの道は、今ではバスの通る道になっている。ところどころには旧街道の名残りとどめる石置みが残っている。

むか

昔は、武蔵修業の武士が深瀬川を片手に、両手を腰にさし、正木坂の道場をめぐって歩いて行ったことであろう。そのころとすこしかわらず街道にそって、

むかしながらの家々が点在している。両側の田畑は山の中腹まで耕作されている。

段々畑は山里のいじめといた寂しさを語っている。この街道は谷間をぬって

柳生の里に入り、日ヶ瀬街道、笠置街道へと分れてゆく。この道の南側には神野山が、

望める。古くから信仰の山となり、山腹の南面には神野寺がある。この山は西取太二川

ハンレイ岩の山である。又北東の中腹には巨岩、奇石の数百メートルも続く鍋倉の奇勝

がある。大慈仙を過ぎると、忍辱山（ニラセ山）が見えてくる。この山には円成寺がある。

この寺の歴史は古く遠く平安末期まで遡ることが出来る。宗派は真言宗である。この寺にはすばらしい仏像が多い。ぜひ一見すべきであろう。例えば、大日如来坐像、これけ

運慶の作らしい。阿蘇陀如来坐像、四天王立像、いずれも重文で鎌倉時代の傑作である。

また楼門前には梵地があり、忍辱山流を始めた寛通の築造と伝えられている。

大柳生に入ると、南明寺がある。この寺も鎌倉時代のものである。柳生中村に入ると、石仏が見られる。又丹生神社がある。そして柳生家菩提寺である芳徳寺がある。そこには柳生一門の剣士たちが静かに眠っている。この街道にうつる多くの古墳が散在している。なお田原村大字南田原にある崖仏は特に一見すべしであろう。剣の故郷である柳生の歴史を見よう。

柳生の里の歴史に現われるのは遠く平安時代になる。和名抄には添上郡楊生郷として出てくる。江戸時代には柳生一才石の陣屋があり、明治四年に柳生県となり、目斗奈良県に並合、現鹿柳生町となっている。

柳生家の歴史をふりかえると、菅原家の族大膳亮永家の子播磨守永珍が後醍醐帝に従い、その功により柳生の庄を賜う。それ以来豪族としてこの地を支配した。柳生の地はもと笠置城の搦手にあたり、元弘の変に合戦があり、柳生家の先祖が合戦に努めた旨「分限院日記」にみえる。おそらくこの戦により永珍が功を立ったのであろう。ただ柳生家がずっと続いたのではなく、一時断えたことあったらしい。

柳生家の家系を示さう。

播磨守永珍(美作守)——備前守家重——三河守道永——孫次郎家宗——新太郎光家(細川高国に属す)——因幡守重永——美作守家嚴(三好長慶に属す)——新左衛門家嚴(新守、但馬守石舟斎)——新次郎家勝・弟、新左衛門家矩(但馬守、又右衛門、從五位下、後從四位下)——七郎三嚴(千早衛)——飛騨守宗冬(後矩、從五位下)——宗春——宗在——俊才——俊平——俊峰——俊則——俊量——俊章——俊能——俊順——俊初——俊久

家嚴、家嚴は松永久秀とともに三好長慶に從つた。又家嚴は戦国時代末に劍聖といわれた上京伊勢守信綱の神流流を學んだ。後白から新流流を創始し、新流流を流し、家康に伝授した。そのころから有名になつた。関ヶ原の合戦には家康とともに徳川方につき、二百石を給う。家矩は大坂陣、坂崎出羽守の鎮座に功を立て、千石を給う。後秀忠、家光の指南役となり、かつ將軍直臣となつて一六三二年、總目付に任ぜられる。うゝ一萬二千石の加増となつた。又、朝鮮にも信任厚く、從五位下、死後從四位下となる。家矩の死後、三嚴が継ぐ、正保三年である。この時分封し、三嚴八千三百石、宗冬四千石、菩提寺芳徳寺領二百石となる。後家康の代になつて、一萬石の別荘に入つた。

なお一名柳生新徳流と称するが、三蔵以後を柳生流という。この勢力も江戸中期以後は次第に低下していった。又分家には、尾張藩尾州柳生家がある。

柳生式共帳なるものが知られてゐるが、実定あつた本どうかわからない。ただ柳生家が大きな勢力を有つたのは、単に剣が強いという理由からではない。それは宗藏がたつた二百石にあまんとなければならなかつたのはその証拠である。その点、宗矩は剣ばかりでなく、政治的手腕にもたけていた。関白家と近づき、朝廷の勅さけすべとをえつてゐた。又総目付となり、全国大名の監視をいついたが、多くの大名の弱點をにぎつていたものと思われる。だから一万石といふのも、政治的発言力、強かつたものと思われる。反面他の大名から攻撃の的にもなつた。そこにさまざまな物語がうまれたのであらう。これ、正木政には、道場が再建され、亘剣士たちがいよいよ兵衛を夢みて、将来にはけんていいる。

剣は解り

提補

月ヶ瀬の由来と訪れた人々

月ヶ瀬は昔の大和の国、今の奈良県東北端、添上郡を流れる名張川の峽、ふたがそこは大和と云つても伊賀の国、今の三重県上野市と山城の国、京都府相楽郡に接して、名張川も源流は大和の宇陀川だが、名張川の名は三重県の地名から出たもので、月ヶ瀬のすぐ下流は山城に入つて木津川になつてゐる。

それに今は国道になつてゐる奈良街道(伊賀街道)からも遠く、国道にそつて走る国鉄南西本線からかなり離れて、月ヶ瀬の入口は昔から大和の奈良よりも伊賀の上野であつたのだから今日では人に多少縁遠くなつてゐる。

昔はツキノセであつた地名も今は「ツギガセ」と読むようになった。色々な観光地にありがちな享樂的雰囲気はなく色々な、文学者の紀行文や富田鉄斎の絵のごとく昔ながらの平和な、あるといわれゐる。

大和といつても奈良平野から山波に隔てられ、附近で最も近い名所と云えば京都府に入る空置山がある位で、この峡谷の寒村、月ヶ瀬が梅の名所として知られるようになつたのは江戸時代後期、伊勢の国津々藩(津市)の学匠詩人だつた斎藤拙堂の「月ヶ瀬記勝」という詩文や絵をあつめた名著のためでその中には出雲に語られた頼山陽などの詩(別冊パンフレット参)もあるが、序文にも梅谿とか谿山とかの文字がしばしば眼につくように月ヶ瀬の真の魅力は諸山これ梅花といつた絶爛ぜつらんさにあるのではなく、静かな峡谷の中に村人の古来からの生活と溶けあつて自然化した梅がちらほ

らじ純日の香りを放つ清雅な自然美にあるという。月瀬の梅のみこりは、一二〇五年(元ス
三)に尾山真福寺の境内に天神社を祭つてウメを植えたのにはじまり、江戸時代には京都の
人が使つた京紅(きやうこう)の原料として梅の葉を黒く蒸し焼にして乾燥した馬梅(うまばい)を作ることに用いたの
で、数百年本のウメの木があつたが、化学染料の普及や最近のダムの構築で縮小されたが、

今日でも少量ながらつくられている。

月ヶ瀬は奈良県添上郡月瀬村にある梅林地区で月瀬村は、木津川の支流石張川の深い谷間
の赤れをはさんで点々と散在する月村、大字のつち、石打をのぞく桃香野、月の瀬、尚、
長引、尾山にわたり、東面約四キロ約十ヘクタールに数々本のウメの木が植えられ、日本
一の梅林郷である。前出の部落はいづれも山の頂のよくな所に固つていて特に一番

高い尚は昔から平家の落人部落ともいわれている。

月瀬を訪れた文人は、この梅林の歴史的な中心と思われる月瀬の高い懸崖の部落中程にある
「かぢやの江戸末期からの芳名帖や明治以降の投宿人姓名録」の中に多数みられる。幸田露伴
、森田思軒らの根柢党(明治41年)尾崎紅葉らの硯友社同人(同年同月上記より数日
遅いが不明)の名がみられ、郷土史家の月ヶ瀬紀行(前者)、江見水蔭の硯友社と紅葉と
いつ本の硯友社と旅行の中の記録にみられる。紅葉時代のデビュー当時の三人ともウメだ
が露伴はウメと自記二人が競うように月瀬を訪れた事実が興味深い。揃いの大黒帽(宇生帽)
に薩摩飛目の書生羽織、下駄まで山桐の太鼻緒の揃いの写真がみられ風流さは一役と感じ
られる。他に文人として田山花袋の月瀬遊記(紀行文)(明治22年の月刊の「南船北馬」とい
う本の巻頭にある)かぢやの記録では明治21年3月18日28才の時

から武陵桃源さながらの月瀬峡谷の眺めに陶然となつて、山を下り、谷底の月瀬橋を渡り
いよいよ一目千本と称される老梅林の胸突き坂の小径を辿つてその上の月瀬に向ひ
「かぢやしの敷居をまたぐころぽつぽつと長雨が降つてきたさまを

「長き暗き峻阪をのぼりて、日の暮れなんともる頃、山の半腰なる旅館かぢやといえ
るにやどりたるが、浴後欄干に凭りて一望すれば、春雨霏々として四山に滿ち、暮
色蒼然として檐頭を压し、兩岸の梅花は流雪々々として殆ど將に無からんと欲す。
としるされブルー・シルクをうぬぬ梅の香のただよう雨にうたれた光景はまさに恍惚
たるさまを思はせる。

註 斎藤拙堂（一七九七—一八六五）

江戸時代末期の儒學者、文章家。名は正謙、拙室はそこのち。別に鉄研（てつけん）とも号した。

本姓は増田、母の実家斎藤氏をつぐ。伊勢三重津藩の江戸井藩邸で生まれた。

古賀精里に學んで宋學を主としたが、必しも抱泥しなかつた。二十四才のとき藩

校の學政につき、以来津藩の學政を主宰した。当時文章家として評判高く、頼山

陽もオに敬服していた。その紀行「梅溪遊記」はとくに有名で月ヶ瀬の名

はこの文によつて世に広まった。晩年幕府の儒官に招かれたが藩をさるに忍

ばず病と稱して辞した。著書は「國史紀事本末」「高青邱詩醇」など多し。

主 別冊パンフレットは月ヶ瀬観光協会発行のもので御自由におとりしていただきまうで
さい。

竹園と芭蕉

この園は藤室家の下屋敷で現在は深田氏の所有であり客室に
入内を許さぬ。庭の東北の隅に極型楓が葉を茂らせている
芭蕉庭を写真取った。昭和5年深田孝夫氏が建てた。

さまごまのこを思ひ出す秘蔵 松香
の句に下ってしぬまでハ景事と世にわけてたがたまらず風とな
た。

芭蕉家

芭蕉は杯庭で生まれたという説があるが、柳土堂家(島山土年家)
により無杯町三十三番屋敷(無杯町30番地)とされる。はら
今では上野市所属
この家の庭はみづから建てた元禄時代のもので推定され新月軒でか
つての無名庵の跡がある。

古里や露のまゝ宜くとしのくれ
という町やうき年運立の句碑があり、芭蕉の句碑はこの二つだけ

故郷塚

足利町の松尾家の墓所である愛染院にある。入って進む左は句
碑

句は芭蕉に白壁の墓あり

左に折れて角をくぐると故郷塚という横線が通じてある。
故郷塚に赴く左手に西園寺小玉卿の墓がある。入って4層半、旅
れて内望の厨子の中に芭蕉の木像がある。二層の客室がある。
その奥は芭蕉の墓である。故郷塚である。
故郷塚は遺囑で石には「芭蕉居士法印」と刻まれている。

芭蕉

芭蕉の墓は芭蕉の五庵(無名・臥竹・芭蕉・芭蕉・芭蕉)の
西園寺(無名)は無名庵を別として他はみな門人の庵で、現在も形として残っ
て残るのは土蔵の芭蕉庵である。

井のおしの音を聞にはよ草の庵
という句を芭蕉し土蔵に与三郎のてそと庵となった。
中内をくぐると池がある。昔は「池や...」の句碑がある
庭内東部の竹藪の半つ腰の土蔵の碑がある。
その庭の近くに臥竹の墓である。土蔵に足守がある。

「人生はよく旅にたとえられる。漂泊の芭蕉... — 二不情」

花垣神社

名阪道路を沿田まどいを新した予野にある。

一里はみな花垣の子孫かや

という句歌が神社の社頭にある。神社から道を左へこり、山に上ってくと天照御念物の鏡本は奈良の八重桜にこいわれている様がある。

敢国神社

近世式神名に載る敢国神社(おへのくにのかみやしろ)、当国の一の宮、社頭右角にき蕉の石碑

手は全がむおんさへ梅のにはひかな

この神社は伊賀富士とけばれる南宮山の裾にあり王殿は竹藪に囲まれ、香炉の脇にきもきがある。

日置神社

荒本又右衛門出生の地であり、伊賀の仇討につかつた刀が納められてる。参道右側社務所前に

皇う一言やあらしのさく良麻

とゆうき蕉の石碑がある。

土野城

藤堂高虎が伊予の宇和島から移されて、伊賀を領し、慶長17年五箇の天守閣を築いた。7月台月に伊賀し高し石垣と面壁を修すの事となった。高虎はこの城下町に生れ藤堂新次郎宗に仕え良精、その子陣吟は麻湊の学に造詣が深く、詩歌に文人的な主眼があり、土野に京都の文化に倣っている。

文献>山口聖子などの著作

